

<県研究主題>

生徒一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 高橋 彼環（県央地区）

<研究主題>

「根拠を明確にして自分の意見をしっかりもち、自信をもって述べることができる生徒を育成するための授業の工夫 ～能動的な教え合い学び合い～

1 提案内容

(1) 生徒の実態を踏まえた課題意識

「結論を短く簡単に答えられるが、根拠を明確に、具体的に説明することができない。」「自分の考えにあまり自信がもてずに発言をためらってしまう。」「心の中にある思ったことや考えたことをうまくまとめて言葉にできない。」こうした生徒の実態を踏まえ、「根拠を明確にして自分の意見をしっかりもち、自信をもって述べることができる生徒」を育成したいと考えた。そこで、「能動的な教え合い・学び合い活動」を実践して充実させ、生徒一人ひとりの国語力と学習意欲を高めようと考えた。

(2) 研究授業の詳細

①教材について

『少年の日の思い出』（ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳：光村教育図書「国語1」）は大きく二つの部分に分かれており、前半の語り手は「私」、後半は「私」の「客」が「僕」として思い出を語っている。この教材は、それぞれの登場人物を様々な角度から捉え、様々な描写に着目することで、自分のものの見方や考え方を広げたり深めたりすることができる。研究授業では、「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れ、ものの見方や考え方を広げ、深めさせるだけでなく、自分の考えをもたせたいと考えた。

そこで、それまではペア学習や少人数班での「教え合い・学び合い活動」などの言語活動にとどまっていたが、この単元の学習活動を「生徒は主体的に『教え合い・学び合い活動』をする」ということを中心に進めた。

②学習活動について

この研究授業では、ものの見方や考え方を広げて深め、自分の考えをもたせるため、『少年の日の思い出』を紹介するポップの作成を行うことにした。

ポップの作成を通して作品についての理解を深めさせるとともに、文章に表れた登場人物のものの見方や考え方などについて他者と意見交換をすることで、自分のものの見方や考え方を広げさせ、自分の考えをもたせることを目標とした。

そのために、ポップの作成時から机間移動を自由としたり、作成後に行う発表会の場では必ず質問や意見、感想を交換する時間を設けたりするなど、話し合うこと、「能動的な教え合い・学び合い活動」を重視した単元計画とした。

(3) 研究成果

- ・「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れて実践して言語活動を充実させることで、根拠

を明確に自信をもって自分の考えを述べることができる生徒が増えた。

- ・既成の枠にとらわれない「能動的な教え合い・学び合い活動」を実践することによって、問題解決に対して生徒同士で気軽に話し合えたり、問題を解決できたり、自分の考えを広めたり深めたり、更に自分の考えを再構築したりすることができた。
- ・「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れて実践して言語活動を充実させることで、「理解できた時の喜び」や、「理解できないことの悔しさ」といった気持ちを感じる機会が増え、学習意欲が高まった生徒が増えた。

(4) 今後の課題

- ・学習支援が必要な生徒に対しては、より綿密な手立てが必要である。
- ・あれこれと欲張らず、指導内容を絞る。
- ・生徒に評価の観点をより意識させる必要がある。

2 協議内容

グループに分かれての協議後、全体で共有した。主な意見は次の通りだった。

- ・実態に応じた手立てを考えている。
- ・少人数のグループなどの効果を改めて感じた。
- ・生徒に学習プランを明確に示している。
- ・机間指導を丁寧にされていた。
- ・生徒が学び合う基盤づくりをした授業としてよい。
- ・生徒が積極的に取り組む課題であった。

3 助言

- ・「根拠を明確にして自分の意見をしっかりと持ち、自信をもって述べるができる生徒を育成する」ために、単元を通して課題解決を図る学習活動に「能動的な教え合い・学び合い活動」を取り入れたことは効果的であった。
- ・生徒の「能動的な教え合い・学び合い活動」の展開に向け、教員の適切な関与、効果的な働きかけを行うための机間指導のあり方について、じっくりと考える機会をもってもよい。それは、教員の授業力を高め、生徒の学力を高めることになる。

提案2

提案者 山口 剛人（横浜地区）

<研究主題>

9年間の系統性を意識した「読むこと」の指導と評価

1 提案内容

小学校や前年度の学びで身に付けた「読むこと」の力を読解に生かすことにより、生徒たちは各々の「学び」を自覚し、主体的な学びが実現する。中学3年生の論説読解でも小学校で身に付けた「始め-中-終わり」の構成で捉えられることを理解し、筆者の主張を同じ手法でつかみ取る。論理の展開を捉えるために、あえて「中」の部分を読まずに、その部分の文章を生徒自身が書くという言語活動を設定した。この際に、生徒たちは、「題名」「始め」「終わり」から、「中」に入る文章がいわゆる「クリティカル・シンキング（多様な観点からその妥当性や信頼性を吟味し考え深めること）」の視点で書かれていることに気付く。このとき、今までの学びの履歴を再認識し、論説の読解に意欲をもって向かうことができるようになると思う。

(1) 授業実践について

単元名・教材名

構成と表現に着目して「自分の『中』」を書き、文章の論理の展開をとらえよう。

「作られた『物語』を超えて」（光村図書『国語3』）

①単元目標

- ・構成や表現に着目して「中」を書き、論理の展開を捉えようとしている。
- ・自分の考えた文章と筆者の文章を比較して、構成や展開、表現の仕方について評価している。

②指導計画

ア 学習の見通しをもつ。小学校第3学年教材の「イルカのねむり方」で構成を確認する。

小学校の既習事項を使い、大まかな構成や筆者の主張を捉えられることに気付く。

イ 本文の「始め」と「終わり」を読み、「中」にあたる部分を自分で書く。

あえて最初から本文全文を通読しないことで文章への興味を高める。「自分の『中』」を書くには「始め」と「終わり」の内容や語句に着目する必要がある、構成を意識して読みが深められる。

ウ 自分の考えた文章をグループで読み合い、交流する。

○グループ学習で話し合う内容を明確に示す。

○グループ学習を行う目的を明確に示す。

○グループの人数を少数にする。

以上を提示、実践することが有意義な活動につながった。

エ 本文を通読し、筆者と自分の論理の展開の仕方の違いを考える。

論理の展開を理解することで、筆者の主張が理解しやすくなる。

オ 筆者の論理の展開を確認して読みを深める。授業を振り返る。

今までの学びで論説が読みやすくなる。自分の学びを自覚し、主体的な学びが実現する。今後の学習にも生きる。

(2) 成果と課題

生徒は自分の文章と筆者の文章を読み比べることで、筆者の論理の展開の工夫に気付くことができた。筆者の文章のほうが説得力があるが、構成と展開の仕方には共通点もある。論理の展開が理解できると筆者の主張が理解しやすくなることを身をもって理解した。

課題としては、本単元で付けた力があくまで「読む力」であるということである。「書く」活動から、生徒は「書く力」を付ける学習であると誤認識しがちである。指導と評価において、「読む力」を付ける学習であることを繰り返し意識付けることや、振り返りシートの中での問い方に気をつける必要がある。

2 協議内容

協議の柱 「確かな学力」を育成する年間指導計画及び評価計画の工夫・改善

～指導事項に沿った言語活動の工夫と改善

6 グループに分かれてグループ協議を行った。授業者への質問なども含め、以下の話題が出た。

- ・論説文の「中」の部分を書かせるという活動が目新しく、興味深いものがあるが、難しさも感じる。書かせるためにどう指導したか。➡ 事前に生徒に対し例となるものを示した。
- ・小学校既習教材の説明文を使う導入が生徒の関心を高める。そこで身に付けた力を利用する

ことで知識が定着する。

- ・評価材に対する「読むこと」についての評価規準はどうしているか。
 - ➡ 展開と構成に注意して書けているかを評価した。具体例の面白さなどは評価しない。
- ・9年間の系統性を生徒に自覚させるという点に興味をもった。生徒の考えを深める話し合い活動のために、ワークシートを利用するなど工夫がされていたが、他に生徒に意識させたことはあるか。
 - ➡ 単なる意見交換に終わらせないよう、互いの文章を評価する際に「よい（改善すべき）と思った理由」を明確にするように指示した。
- ・評価の観点や規準をどこに置くか、振り返りシートの評価をどうするかが課題である。
 - ➡ 振り返りシートは「関心・意欲」の観点で評価している。どのような力が身に付き学びができたか、これからの学習に生かしていけるかという点を評価している。

3 助言

- ・よく準備された指導計画と授業であった。
- ・小中9年間のカリキュラムの系統性をもつ授業実践であった。
- ・小中連携を考えると、小学校の既習内容を知ることが大切になる。小学校の学習内容を知ること、中学校でも効果的に指導ができる。しかし、いわゆる一小一中ではなく複数の小学校から進学してくる中学校や、転出入の多い中学校では学習内容に違いがあることも配慮する必要がある。
- ・実践事例集を編集し研究会で共有するなど、各市町村で研究を深めたい。

協議の柱に即した協議

グループに分かれての協議後、全体で共有した。

Aグループ「子どもの実態から、付けたい力を明確にした授業づくり」

Bグループ「子どもの実態に応じた教員の適切な関与」

Cグループ「活動の質を高めるための教員の適切な関与と授業構成」

Dグループ「効果的な言語活動」

Eグループ「ねらいの達成に即した言語活動の充実。生徒の実態・系統性を踏まえる」

Fグループ「生徒の実態を踏まえた指導計画の作成」

全体のまとめ

両実践に共通するのは「チャレンジ」ということ。それぞれ「教員の関与」、「領域相互の関連」について、課題意識をもって取り組んだ実践である。それを踏まえ以下のことを確認しておきたい。

- ・言語活動を通して、付けたい力（言語能力）を育めたか。
- ・「グループ活動」の長所と短所。
- ・「アクティブ・ラーニング」とは、特定の型ではなく（「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」という）授業改善の視点である。
- ・「振り返り」は単なる感想ではなく、何を振り返らせるのかを意識すべきである。